

『偕行』校正の

難しさと重要性

喜田 邦彦 陸自66

『偕行』編集者の「天国と地獄」

私は、6年半もの常勤編集委員を終えました。反省すべき点が多々あり、読者や執筆者にお伝えしたいこともあります。そこで、番外編として筆を執らせていただきました。

編集業務は、国防・慰霊・花だより等の原稿を集め、写真の添付や割付を施し、機関誌の形に仕上げますが、そのプロセスで難しい業務の一つが「校正」です。校正とは、原稿の誤りを発見し、印刷所に訂正を求める作業です。毎月発刊する『偕行』は、60頁程度で薄つべらに見えますが、掲載した文字数から言えば、『正論』や『文藝春秋』の3分の1くらいになるでしょう。

その月刊『偕行』が会員に届けられた直後は、編集者にとって「天国と地獄」が交錯する時期なのです。ウキウキする天国の気分は、「初めての投稿を掲載していただいた」との感謝の電話や、「夫の仏壇に『花だより』を供えます」との奥様からのお手紙を頂いたときで、「少しはお役に立てたかな」と密かな喜びをかみしめる瞬間です。

一方、地獄・ヤレヤレの気分は、予想もしなかったお名前や用語の誤記に関するお叱りや、「ご苦労だが、まだまだ勉強が足りないね」との励まし(?)の電話をいただく時です。旧陸軍の慣習、呼称・用語の不備、作戦場所や日時の間違い等が、原典のコピーと共に送られてくることもあります。

文字・用語・事実関係に関する校正ミスは、お詫びして訂正するしかありません。一方で、従前会員の中には軍事以外の分野に関して博学の知識や、短歌・俳句等に造詣の深い方が多いと感心させられます。そして、百歳から自衛官の現役層までという読者層の厚さと浅学非才の我が身を振り返ることになるのです。

極めつけは、校正の一部をお願いした編集経験者(複数)から、通信簿が毎月届くことです。全論考についての簡単な書評と、誤字・脱字・送り仮名・不適切用語、句読点の使い方を含め、30〜10カ所のミスを指摘されますので、編集委員は「減った、増えた」と一喜一憂する始末です。

なぜ、誤記やミスが起るのか? 従前会員からの達筆(?)の手書き原稿は少なくなりました。「読みにくい」論考は、審査にあたる「若い編集者」(といっても60歳台)にとって難

敵でした。

一方で、パソコンを用いたメール原稿が多くなり、「校正もずいぶん楽になったでしょう」と言われます。ところが今度は、「パソコンで入力する際の変換ミスを再確認しなければならぬ」という仕事が増えたのです。

執筆者は、内容や文体に集中してパソコンに入力するので、仮名漢字や同音異義語の検索・変換をパソコンに任せて一括変換し、個々の用語をチェックする人は少ないでしょう。

編集者もまた、パソコンに頼ります。印刷所とのやり取りや、経費と時間を節約するためです。しかしそれが慣習化した結果、編集者もまた仮名漢字や同音異義語を「見て知っているが書けない」状況になりました。

更に、電話・インタビューで聞いて文字に起こす(音通)場合が多くなり、安倍首相が阿部首相になったり、渡辺・渡邊・渡邊の区別がつかなくなっているのです。

現代はパソコン、電子辞書、携帯による検索が全盛で、分厚く重い広辞苑等で漢字や熟語を調べる手間を省きます。その結果、電子機器に表示された用語は正しいと過信して入力するた

いる個人・施設のお名前を誤記する結果になります。

例えば、本冊・花だより原稿では、「靖国神社」と記した原稿が散見されます。「靖国神社」と「靖国通り」は違います。英霊のおわします場所を誤記したのでは、「せつかくの祈りが届かないのでは」と思いつつ、校正者が一つ一つ見つけて誤記(ゴキブリ)を駆除・訂正しています。

更に、同じ誤記を繰り返せば、電子機器の賢い(?)学習機能が働いてそれが常態化されます。執筆者・編集者に関わらず、文章の一括変換を利用する人は、注意が必要です。

冊子に掲載した論考や文芸作品は、永遠に残ります。送り仮名、漢字の誤記・ミスのみならず、年代(西暦と元号の不一致)や場所(戦場)の考証は欠かせないのです。

そこで編集委員会は、会員の方で校正・編集に携わった経験者、戦争・皇室用語・短歌等の文芸に関して詳しい先生方をお願いし、特別に校正を依頼する措置を執っています。靖国偕行文庫をはじめ、国公立の図書館に、献本や贈呈をします。ミスの永久保存は努めて避けたいと願った結果です。

『偕行』によく出るゴキ(誤記)ブリ次に、『偕行』によく見られる誤記

を紹介しましょう。「国歌斉唱」が「国家斉唱」になっているのを見かけます。これは意味が違っているのです。校正者も気が付きやすいです。しかし「人工衛星」が「人口衛星」になったりすると、校正者としても見逃しは起こりえます。「衛星都市」が「衛生都市」になっているのも、新聞・雑誌で時々見かけます。

その他に、「歴と曆」の語では、「還歴」や「西歴」の誤りが見られます。国会の「召集」は天皇陛下が行い、予備自衛官は法律に基づいて「招集」とされます。通常爆弾は「被爆」ですが、核兵器の場合は「被曝」になります。士官学校に祀られたのは「雄健神社」であり、「雄叫」は軍歌集の標題です。なお、「酒と酉」は「酒脱」が正解で、「斉と齋」では齋の略字が「齊」ではありません。

熟語では、「一敗地にまみれ(血)」、「意味深長な(重)」、「若冠○○歳(弱)」、「単兵急に攻める(短)」、「腹心の部下(臣)」等の誤りが、「戦史・戦記もの」に時々ですが見られます。

地名にも誤りが見えます。満州は満洲、ピョンヤン(平城)は平壤です。俗語も世代とともに変化します。旧陸軍人が愛情を込めて使う区助(区隊長)副官(女房の愚妻)は、新しい会員にはわからないのです。

一般記事では、「移動・異動」 「意志・意思」 「解放・開放」 「科学・化学」の区別に誤りが見られます。また、故事成語では、「泰山鳴動」 「獅子心中の虫」 「梅檀は双葉より香し」などに誤りが見られます。

校正者は、せっせとゴキ(誤記)プリ退治に努めるのですが、どうしても見逃しが出ます。「パソコン返還」、失礼しました。「パソコン変換」で「平和都市宣言」を「平和と死宣言」にしてしまったのでは、洒落にもなりません。

しかしながら、チェックマンたる校正者にもしょっちゅう錯覚が起こります。例えば「圧倒」が「圧到」、「回復」が「回復」、「学問」が「学門」となっているのを見落とします。そうしたミスは、初めの文字「圧」「回」「学」に引きずられ、校正者の目が後の文字を読み飛ばすためでしょう。

三文字、四文字の熟語にも誤記が見られます。「先入観」が「先入感」、「大義名分」が「大義明分」、「戸籍謄本」が「戸籍騰本」だったりします。これは、原稿作りにあたる筆者も、校正にあたる者も、初めに出てくる二文字に安心し、後の文字は記憶に頼って読み飛ばしてしまうからでしょう。

執筆者に共通することは、自分が書いた単語・語順・語感を知っているのに、点検の際も部分を読んで、後は「読

み飛ばす」傾向があることです。執筆者が自分の原稿を見直すときは、この錯覚に陥りやすいようです。

記憶力も人によって異なり、記憶違いも起こります。数字にめっぽう強い人、弱い人。歴史事象の日時をこまめに覚えていて人、年齢、男女、経験によっても相違が見られます。

執筆者・校正者にも認知症の影が忍び寄っています。そこで編集は、戦争等の事象や、大正・昭和初期の世相に詳しい人をリストアップし、その方たちに校正や時代考証をお願いしております。しかしその方たちも高齢になれば、後継者がいないのが現状です。

ゴキブリ退治をどう進めるか

校正者が誤植の発見や見落としを防ぐには、声に出して読むか否かは別としても、単字・単語を確認する必要があります。ところが、そうした点検・校正のみを追っていると、「文章全体の道筋を失う」という落とし穴にはまらかねません。

また、一人の校正者が3度読むより、2人の校正者が1度ずつ読む方が効果があります。別の人が違った目で、違った知識・経験をもとに、違った角度から読むと、盲点に気づきやすいからです。

しかし読者の側からすれば、文の流れに従って文意や全体の意味を把握・

理解するので、語句を一塊として読むのが自然なかもしれません。

では校正あたり、「規則や教科書はあるか」と問えば、これさえ覚えればという「虎の巻」はないそうです。なぜでしょう。

世にある文章は、東西の古典・宗教書、現代の学術・芸術書、小説・娯楽書等は文化の表象であり、特定ルールで処理しきれない「生き物」だからです。時代と共に、文字も、読み方も、意味も変わり続けるので、出版社も数年に一度改訂版を出します。決してカネ儲けだけではありません。

「生き物」に対応しつつ、誤解を招かないようにするため、学会や出版社は自分たちで目的に合ったルールを定めています。だから、天下の大辞典や高名の編集者による辞書も、統一されていません。

そのため、初心の校正者はあせってしまします。そこで、文部省認定の校正実務講座が用意されていますが、これにも「世の中に校正をマスターした人は一人もいない」「これさえ覚えれば合格という虎の巻はない」と慰めているのです。

「ゴキブリ退治は無くなりません」「日本語は非常にあいまいで難しいです」「ミス直すミスについても」海容のほどを」が、私の拙い経験から得た結論です。